

⑤シンポジウム「これからの教師の主体的な学びについて考える

～地方国立大学による研修機会の創出～」開催報告

開催日時：令和6年2月17日（土） 10時00分～12時00分

開催場所：くにびきメッセ大展示場（島根県松江市学園南1丁目2-1）

主催：島根大学

後援：島根県教育委員会・鳥取県教育委員会

参加者の属性及び参加人数：

教育委員会関係 10名 学校関係者 14名 大学関係者 7名 参加者合計 31名

シンポジウム趣旨：

令和4年7月に教員免許状更新制に関する法律が改正され、新制度のもとでは校内研修を核として、多様な研修主体によって教師の資質・能力の向上が目指されている。これを受けて、島根大学では、教員研修の高度化に資するモデル開発事業【文部科学省委託事業】として、「バランスの取れた資質能力を向上する教師の学びのモデルの確立～地方圏に所在する大学による研修機会の創出～」に取り組んできた。

本シンポジウムでは、この事業で実施した「教員研修等に関する調査」の結果の報告に加えて、学校教育現場・教育委員会・大学の立場から今後の教師の学びについて、特に大学における教師の研修のあり方を中心に共に考えることを通して、教師が学び続ける機会を創出することの契機とする。

日程及び内容

1 開会行事（10：00～10：10）

挨拶 島根大学教育学部長 河添 達也

2 「教員研修の高度化に資するモデル開発事業」報告（10：10～10：50）

島根大学 津多 成輔・深見 俊崇・川俣 理恵

1）事業概要説明

2）調査分析の視点

教員研修等に関するアンケート調査の結果分析の視点は次のとおりである。

- ①教員研修を取り巻く現状 ②学校種 ③労働時間
- ④卒業した課程（教員養成系／非教員養成系） ⑤キャリアステージ

3）分析結果のまとめは以下のとおりである。

- ・校内研修が中心となっている一方で、学校外の研修は相対的に受講されていない。
- ・主たる受講障壁は、「多忙」と「物理的距離」である。
- ・オンライン研修は、浸透しつつある一方で3割は受講しにくいと感じている。
- ・高校教員は、相対的に後向きな傾向がある。
- ・多忙は、主体的な研修受講の障壁である。
- ・教員養成系学部卒業者は、研修の受講に対して前向きな傾向がある。
- ・時間的余裕のなさや後補充の教員・準備の問題による障壁は、若手ほど強く感じている。
- ・ICTの活用やオンライン講義の受講はベテランほど抵抗感がある。

3 「大学の研修に期待すること」(10:50~11:00)

島根県教育庁 学校企画課人材育成スタッフ調整監 村上 修司
鳥取県教育センター 教育企画研修課長 新井 紀子

4 グループワーク

「教師が主体的な学びに必要なこと／できること」(11:10~11:55)

教育委員会、学校、大学関係者からなる5~6名編成6グループによるワークショップを行い、「Ⅰ 教師が主体的に学ぶためには何が必要か、Ⅱ 学校・教育委員会・大学は何ができるのか」について共に考え意見交換を行った。各グループに1名ずつファシリテータ(大学教員)を配置した。

5 閉会行事 (11:55~12:00)

挨拶 島根大学教育学部附属教師教育研究センター長 御園 真史

成果:

◆教員研修等に関するアンケート調査の分析結果から以下の提言がなされた。

- ・学びたい意欲を、実際に学ぶことにつなげる環境を作ること。
- ・特に若手教員が学べる環境を作ること。

◆教育委員会・学校・大学関係者が一堂に集まり教員の主体的な学びの創造について協議を行う、非常に有意義な機会となった。互いの立場を理解しながら、各々ができることを考え、発表し合うことで、三者の協働への第一歩を踏み出すことができたのではないかと。

<当日の様子>



シンポジウム グループワーク 報告 2024.02.26

形式 参加者を、所属、地域が分散するように5~6人の6グループ作り、ファシリテーターとして、島根大学教員を配置した。最後に、グループの代表が対話の内容について発表し、共有を図った。

テーマ テーマ1 教師が主体的に学ぶために何が必要か。 (15分)
テーマ2 学校(校内研修)・教育委員会・大学は何ができるか。 (15分)

グループワークで共有された意見の内容は以下のとおりであった。

1) 主体的な学びを喚起する場づくり

- ・教員に「問い」が生まれるきっかけ、出会いを創ることが、主体的な学びにつながる。
- ・ベテランと若い教員がつながる場、空間を意図的に作る。

- ・教員が、年齢層を越えて、共通のテーマについて、対話することが有効である。
- ・自分の強みを伸ばすためにも、継続してシリーズ的に学ぶ機会により、見通しも持って自分の成長を実感できる場を先生方にもっと提供する必要がある。
- ・授業をはじめ、子どもとの関わりは日々ドキドキの連続であり、授業も子どもに合わせて変えていくワクワク感が大切な動機・モチベーションであり、教師としての初心である。

2) 研修時間の確保

- ・研修に参加意志があっても日程が合わず参加できないことがあり、オンデマンドの開発が必要である。ただし、オンデマンドは、一方通行、倍速で見ている受講生も散見されるので、課題もある。
- ・最上位目標を何にするか優先順位をもってスクラップ&ビルドすることが大切である。

3) 学校・教育委員会・大学に求められていること

学校

- ・研修内容を実践し、先生方に達成感や成功体験を持たせること。
- ・定期的に時間を設定し、児童・生徒の姿をテーマに、全教員が対話することで、新たな気づきが得られまた、「問い」が生まれ、そこから主体的な学びが始まる。
- ・教師はみな、研修を必要としており、学びたいという意欲を持っている。学校長（教育委員会）は教師が研修に向かうきっかけや後押しをすることが必要である。
- ・管理職との人間関係づくりのなかで、一人一人の資質・能力の向上を図っていく必要がある。
- ・教師の視野を広げる学びを取り入れるため、企業が主催する教育に関する内容以外の研修にも参加させる。

教育委員会

- ・各学校にメンター制度を導入し、OJTを促進する。
- ・教師のニーズをキャッチし研修を構築していくこと、そして学校では研修内容を実践し、先生方に達成感や成功体験を持たせること。

大学

- ・理論ばかりの内容ではなく、すぐに使える実践的メニューやハウツーの部分の提供をしていくこと。
- ・学生を現場の教員研修に参加させ教育現場に対する負の先入観を取り払うこと

執筆者一覧（五十音順）

本報告書は以下の執筆者によって共同で執筆された。

香川 奈緒美	島根大学教育学部・准教授
川俣 理恵	島根大学教職大学院・准教授
塩津 英樹	島根大学教育学部附属教師教育研究センター・副センター長
津多 成輔	島根大学教育学部附属教師教育研究センター・講師
長岡 素巳	島根大学教育学部附属教師教育研究センター・特任教授
猫田 英伸	島根大学教育学部・准教授
深見 俊崇	島根大学教育学部・教授
松尾 奈美	島根大学教職大学院・講師
御園 真史	島根大学教育学部附属教師教育研究センター・センター長
吉田 博幸	島根大学教育学部附属教師教育研究センター・特任教授

バランスの取れた資質能力を向上する教師の学びのモデルの確立
——地方圏に所在する大学による研修機会の創出——
報告書

文部科学省 教員研修の高度化に資するモデル開発事業
受託機関：島根大学

2024 年 3 月 29 日 発行

編集・発行 島根大学教育学部
〒690-8504 島根県松江市西川津町 1060

印刷 有限会社松陽印刷所
〒690-0826 島根県松江市学園南 2-3-11
